

ゼカリヤ書 9章 9-12節

ローマの信徒への手紙 7章 21-8章 6節

マタイによる福音書 11章 25-30節

本日の旧約日課はゼカリヤ書です。預言書であるゼカリヤ書は、バビロン捕囚という国家的規模の苦悩を経験したイスラエル・ユダヤの人々に対して、主なる神様の新しい希望を語ります。それは、主なる神様に立ち返るとならば、神様は必ず報いるという希望です。またその希望は、一人の王によってもたらされると告げています。

聖書日課は、「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。あなたの王があなたのところに来る。彼は正しき者であって、勝利を得る者。へりくだって、ろばに乗って来る雌ろばの子、子ろばに乗って」（ゼカ9：9）から始まります。この言葉は、わたしたちにとって、親しみのある聖句といえます。降臨節・アドベントに入った主日聖餐式の奉献唱の文言だからです。また、イエス様がエルサレムに入場された物語とも関連しているからです。

その王がもたらす世界について、「私はエフライムから戦車をエルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれこの方は諸国民に平和を告げる。その支配は海から海へ大河から地の果てにまで至る」（ゼカ9：10）と述べられています。つまり、イスラエルのために戦う、強い王ではなく、武力を捨てて平和をもたらす王です。またその王の支配は、イスラエルに限られるのではなく、「諸国の民に平和を告げる」とある通り、あらゆる人々に告げるのです。

イスラエルの人々は、これらの預言の言葉を聞いたとき、驚くと同時に、真の希望が何であるかを認識したと思います。しかし、この預言の言葉は、歴史上の出来事としてイスラエルに実現することはありませんでした。それゆえに、イエス様が来られ、その希望が真理であることを示して下さったのですが、それから約二千年経過した現在でも、そのような平和はこの地上に実現していません。その意味では、ここに告げられている平和は、わたしたちにとっても、希望であり目標でもあるといえます。

旧約日課が、イスラエルの滅亡と再建、そこからの全世界の平和の提示という、大規模な内容を語っているのに対して、本日の使徒書、「ローマの信徒への手紙」の箇所は、パウロの個人的な苦悩について記しています。それは律法か信仰かという苦悩です。一般的にパウロは、律法による行為義認ではなく、信仰による信仰義認を確立したと言われます。しかし、パウロは、そのような単純な二者択一的選択を行ったわけではありません。確かに、最終的に信仰による義ということ結論とするのですが、その過程には様々な苦悩があります。そして、その苦悩が今日の箇所、それはことに「内なる人としては神の律法を喜んでいますが、私の五体には異なる法則があって、心の法則と戦い、私を、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのです。私はなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、誰が私を救ってくれるのでしょうか。」（ロマ7：22-24）に示され

ています。

このように苦悩するパウロに与えられた希望が、イエス様でした。これは、パウロにとって、信仰的あるいは人生の飛躍ともいえる出来事であったと思います。それは、突然、文脈を超えて「**私たちの主イエス・キリストを通して神に感謝します**」(ロマ7:25)と書き記していることからわかります。パウロは、自分が完成できなかった律法を完成する道を、自分が迫害していたイエス様の姿に見出したのでした。

主なる神様が与えた律法を忠実に学び、守り、歩んできたパウロが気づいた事柄とは、律法を与えた同じ主なる神様が、イエス様への信仰によって人々を救うという、新しい道を与えたということです。それは、単純に、イエス様を信じるだけということではありません。言い換えれば、行動か、信仰かという二者択一的転換ではありません。パウロは、律法とは、主なる神様が与えた法律であり、律法が与えられた行為自体も、律法それ自体も、間違いではあったとは思っていないからです。そして、律法を実施していくためには、人間の知識と知恵が必要だということも知っていました。しかし、そこに問題点があると気付いたのでした。主なる神様の与えた法律・律法であっても、人間の都合の良い方へと解釈してしまう場合があるということです。その結果の一つが、王国としてのイスラエル・ユダヤの滅亡でした。パウロは、イエス様の十字架と復活の姿に、人間の知識と知恵を超える歩みを悟り、それが、律法を完成させると気付いたのでした。それは言い換えれば、イエス様の十字架と復活の姿を通して、改めて主なる神様の愛に気づき、その愛に基づいて、教会で律法を実践する、あるいは律法を超えた愛の交わりを実践するということです。

パウロは、イエス様によって示された、この新しい生き方を、「**霊と肉**」という言葉を用いて表現しています。「**キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです**」(ロマ8:2)。つまり、それまでの一切の歩みを「肉に従って歩むこと」として、イエス様が示した知識と知恵を超える歩みを、「**霊に従って歩む**」こととして受け入れて、その歩みを全うしようとしたのです。肉に従ってではなく、「**霊に従って歩む**」、この単純な事柄は、イエス様が教えてくださった知恵とも言えます。「**天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者に隠して、幼子たちにお示しになりました。**」(マタイ11:25)

教会の役割は、自らが霊に従って歩み、「**霊に従って歩む**」とは、どのような事柄であるかを示すことといえます。しかし、本日の箇所から学ぶべきことは、教会が、イエス様を通して示される知恵に気づく場所でもあるということです。私たちの東京聖三一教会は、100年を超える歴史の中で、いろいろな意味で、気づきを与える役割を担ってきた教会であったと思います。これからもそうあり続けたいと思います。そのために大切なことは、集められる私たち一人ひとりが、主なる神様を慕い求め続ける幼子であり続けることです。主なる神様がいなければ生きていけない幼子であるから、主なる神様に対する謙虚さに満ちた、人間の思いを超えた歩みが始まるからです。